

70 周年

北陸信越工学教育協会 会長
 福井大学 工学部長
 福井 一俊

今年度は北陸信越工学教育協会(北工教)の創立 70 周年に当たります。他の地域の工学教育協会も、また日本工学教育協会(日工教)も同じく 70 周年ということで、日工教では 70 周年を記念して会誌で特集が組まれています。私も北工教の会長ということで原稿を書くことになり、少しだけですが北工教や日工教の歴史を勉強する機会を得ました。この時、大変参考になったのは、我々北工教の 60 周年企画関連の会報でした[1, 2]。日工教や北工教など 7 つの地方組織の設立は戦後直後の GHQ 招聘による米国工業教育使節団の来日から始まっていますが、日工教がこれら地方組織の連合体として設置され、当初は文部省内にあったことや、昭和の時代には日工教は個人会員をもたなかったことなど日工教と北工教の設立の立ち位置の違いもわかります。どちらも本会報ですので一度お読みいただければと思います。また本号にも“年次シンポジウム”の記事がありますが、これも活性化ワーキングの成果の一つであり、この活性化ワーキングの結果が今日の北工教の活動に反映されていることもわかります。

周年つながりですが、高等専門学校(高専)も本年 60 周年を迎え、記念シンポジウム[3]がありました。トークセッションは若手の起業家 4 名が新しく”創る”学校として、来年度(2023 年 4 月)に 19 年ぶりの新設高専として開校する「私立神山まるごと高専」の話題が中心の内容でした。セッションでは別のメンバーがパネリストでしたが、初代学校長はそのメンバーの一人で、ZOZO の元 CTO です。実は福井高専・福井大の卒業生で、なんと我々とはご縁のある方でした。しかし、そのことよりも、起業家精神旺盛の彼らが新しい学校の形態として高専を選んだことに色々考えさせられました。クラウドファンディングの説明[4]を見ると「高専は起業のファーストトラックになる」「オピニオンを戦わせられるよりも、手を動かし何かを生み出せる力が必要」「大学からテクノロジーを学ぶのでは遅すぎる」「高専は社会に直結する最も優れた学びの仕組み」とあります。また、「日本社会では、高校の 3 年間と大学の 4 年間の計 7 年間は、受験や就職活動など何かの準備のために過ごすことが長い間、暗黙のスタンダードとなっています。そんな 7 年を受験も就職活動もなく、未来を変えるために集中できる 5 年間に凝縮できないか」「私たちが目指しているのは教育の変革ではなく、人間の未来を変える場所になること」ともあります。一世代は 30 年といえます。60 年はちょうど二世代が終わる変わり目で、このタイミングでの新たな動きは偶然でしょうか。

[1] 石川憲一：北陸信越工学教育協会 60 年の歩みと未来への展望と期待，北陸信越工学教育協会会報 第 60 号，pp. 7 - 27，2012

[2] 平成 27 年度「北陸信越工学教育協会 年次シンポジウム」～北工教活性化ワーキング 5 年間の取り組みの成果と課題～，北陸信越工学教育協会会報，第 64 号，pp. 3 - 31，2016

[3] <https://www.youtube.com/watch?v=39F1gkK07bw>

[4] <https://www.makuake.com/project/kamiyama-marugoto/>